

未曾有の大震災から 10年を迎えて

櫛引 進一（くしびき しんいち）
（公社）日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会（NACS）
前東北支部長

あの未曾有の大震災から10年を迎え、被災地仙台もすっかり復興し、震災遺構でも目にしなければ震災の面影はどこにも見当たりません。

しかしながら時折、携帯に「緊急地震速報」が鳴ったりすると、思わずあの大地震の恐怖を思い起こします。大震災から10年を迎えるに当たり、当時の経験、さらには最近の世情の変化、変貌を踏まえて今後への備えを中心にまとめてみました。

**震災体験からは非ともこれだけは伝えておきたいこと
（非常持ち出し、携帯品など）**

- ① 1000円札を20枚程度持ち合わせておくこと
停電のためこのスーパー、コンビニもレジが動かない。つり銭が出せないため、「千円定額のセット販売」（例、パン、おにぎり、カップ麺など）となるため。
- ② 避難時に長靴を履いてはダメ
津波が押し寄せてきたときに、長靴では、靴の中に水が入り、走

つて逃げることはできません。当時多くの男性は、この長靴で逃げ遅れ命を落としました。

③ トイレレットペーパーを避難袋に入れておくこと
多くの避難所は、すぐにトイレレットペーパーが無くなります。断水で流せませんが、脇のタンポールに捨てるようになります。どうしてもないときは、当時NTTの電話帳を破り使用しました。

④ 軍手はダメ、必ず革製の手袋をすること
地震の際は、自宅でも家財道具が倒れ、ガラスの破片、さらに、外は瓦礫の山の中を避難所まで逃げなければなりません。軍手では、ガラス片やクギのためすぐ怪我をしてしまいます。

⑤ 携帯の簡易充電器を是非避難袋に入れておくこと
避難所では充電が長い行列です。携帯が無ければ情報がとれません。懐中電灯を用いて手動で充電ができるものが市販されています。懐中電灯と共に備えてください。

⑥ 高齢者は必ず「お薬手帳」を身に着けていること
ほとんどの人は、自分が日頃飲んでる薬の名前を憶えています。避難所では、1週間後ころから救済の医師、看護師から持病の薬を聞かれたときに即座に役に立ちます。薬の色や形だけを言っても、お薬を医師からもらえません。

⑦ 避難用の自分の靴には氏名を記入しておくこと
多くの避難所は、土足禁止です。そのため、入口で靴を脱ぐこととなります。そのためたくさんさんの靴が入口玄関にあり、間違えられて自分の靴が無くなってしまう。

⑧ 避難用の自分の靴には氏名を記入しておくこと
是非日頃から、避難用の靴に自分の名前を記入しておきましょう。

⑨ 避難用の自分の靴には氏名を記入しておくこと
是非日頃から、避難用の靴に自分の名前を記入しておきましょう。

最近の世情から見た 今後の震災対応策の課題

震災から10年を迎え、地域社会も大きく変化、変貌しております。それらを踏まえ、今後の課題

を提起しておきます。

① 高齢化が一段と進み、誰が責任を持って避難所まで誘導するのか
特に団塊の世代は全員が高齢者で一人暮らしや寝たきり介護者が増えております。このように、弱者の皆さんが優先的に安全に避難するためには、行政だけでは、どうにもなりません。特に、大規模震災時には、行政（行政に働く職員）も被災者なのです。

② 外国人に対する対応策をどうするの
10年前とは異なり、現在は、多くの外国人の方々が市民社会の中で生活しております。この方々の多くは、日本の習慣、伝統、宗教が異なり、さらには、日本語が不自由です。そのような方々をどのように安全に避難誘導するかが課題になってきております。

③ 「災害は忘れた頃にやってくる」と言われておりましたが、最近では、台風などの被害も多々あり、「忘れないうちに災害がやってくる」のが日常になりつつあります。首都圏地震の襲来も近いと言われるっております。紙面の都合で多くを記載できませんが、この機会に日頃からこれら災害への備えを心掛けて頂ければ幸いです。

（注）本内容は、あくまでも東日本大震災の実体験をもとに記述しており、今後の安心、安全及びその効用を保障するものではありません。